

「学び続ける」児童を育成する学校改善を目指して ～学校・家庭・地域が一体となって児童を支える取組～

標茶町立標茶小学校
学級数 15
(校長 野口 育子)

I 実践テーマの趣旨

本校は、児童数約 250 名、教職員数約 30 名の中規模校であり、今年度開校 135 年を迎えた歴史ある学校である。ここ数年、全国学力・学習状況調査、標準学力検査等の各種調査結果から、本校児童の学習意欲や各教科等の学習内容の定着度の高さが明らかになっており、学校の取組が一定の成果を挙げていると判断することができる。

「自律し、協働し、拓く子どもの育成」を学校課題として、児童自身が学び続けることの意義を感じ、意欲的に学習に取り組めるよう、学校改善を図り、教育環境の整備をはじめ、家庭・地域と一体となって、教育活動を行ってきた。

II 実践の内容

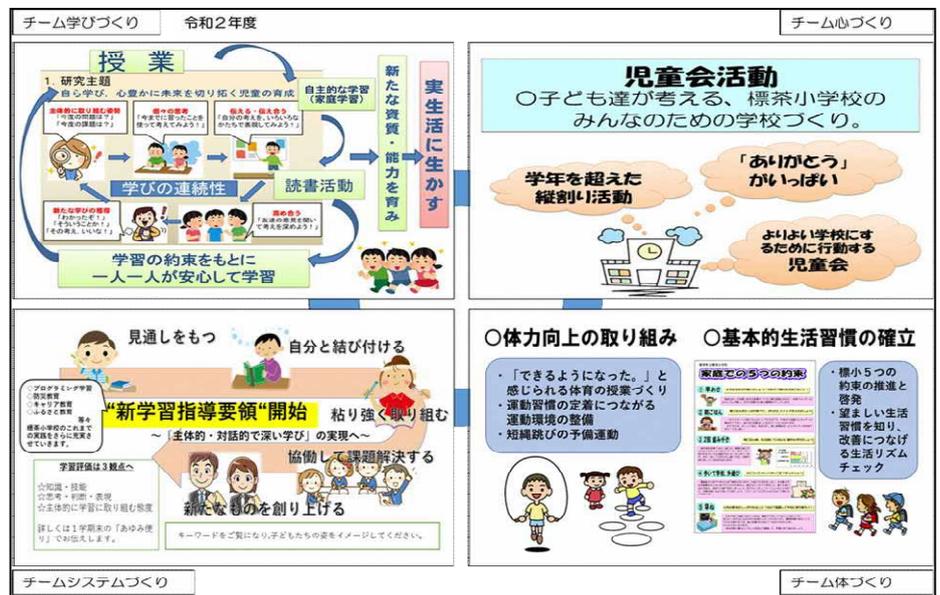
- 1 客観的なデータを用いたカリキュラム・マネジメントの推進
- 2 教科等横断的な教育課程の編成（外部機関との連携）
- 3 学びが継続するサイクルの確立

III 実践の概要

1 客観的なデータを用いたカリキュラム・マネジメントの推進

(1) 標茶町立標茶小学校ランドデザインの共有化

児童の現状を踏まえ、各チーム（校務分掌）が柱とする活動やねらいをリーフレットとしてまとめ、年度始めに教職員及び保護者に配付し、学校の取組を周知している。また、4月のPTA総会で説明し、教育活動の共有化を図ったり、毎年11月に実施している地域公開参観日で、来校した地域の方々に配付したりしている。



【保護者へ配付したリーフレット】

このような取組により、教職員の意識を高め、学校課題の解決に向けて、家庭の役割を明確にし、保護者の意識向上を図るとともに、地域の方々と学校の取組を共有している。

(2) 数値による実証・改善（カリキュラム・マネジメントの視点から）

学力向上に係る各取組について、「ねらい」に基づいた「評価指標」を数値化することにより、検証の際に成果と課題を詳細かつ、正確に分析するとともに、その後の取組を、より具体的なものにしていく。

また、「ねらい」「評価指標」と「学校評価アンケート項目」「見取る場面」のつながりを明確化することで、適時、検証・改善していくことが可能となり、ねらいを達成する取組の改善を図っている。

1 学期末段階で検証し、数値が評価指標に届いていない取組については、年度始めに設定した取組を継続するのか、変更するのかについて、分掌内で検討し、再提案している。このように短いスパンでPDCAサイクルを回していくことが、学力向上に係る重要な取組の1つであると考えている。

ねらい	・国語科、算数科における漢字や計算のつまずきの発見と補充指導の充実を図る。
評価指標	・成績下位層の児童（単元テストC評価、標準学力調査「1評価」）を前年度より減らす。（前年度第●学年下位層●%）
学校評価アンケート項目	児童：「苦手な学習でも努力している。」 保護者：「お子さんは苦手な学習に対しても頑張ろうとする姿を見せている。」 「以前より学習に自信をもてるようになった。」 教員：「児童は、苦手な学習に対して頑張ろうとする姿が認められる。」
見取る場面	・教務部による単元テスト ・チャレンジテスト ・全国学力・学習状況調査、標準学力調査の分析 ・学校評価アンケート

【令和2年度 標茶小の教育～計画編～】

2 教科等横断的な教育課程の編成（外部機関との連携）

(1)教科等の関連が分かる年間指導計画の編成

各教科等の学びを他教科や総合的な学習の時間、特別活動などと関連付け、学びのつながりや広がりをも想定した教育課程の編成、改善を図っている。また、年度や教職員が替わっても継続できるようにするために、各教科等の年間指導計画に、他教科・領域、学校行事等との関連を明記し、教職員が児童の学びの過程をより具体的にイメージできるようにしている。

単元名	6. 流れる水のはたらき							他教科・領域、学校行事等との関連	
月	時	題材名	本時のねらい	学習内容・学習活動	知	思	態		
9	1	単元導入 流れる水のはたらき	流れる水のはたらきに進んでかかわり、粘り強く、他者とかかわりながら、既習内容や生活経験を生かして、調べようとしている。	流れる水には、どんなはたらきがあり、土地をどのように変化させるのだろうか。				流れる水のはたらきに進んでかかわり、粘り強く、他者とかかわりながら、調べようとしている。（行動観察・発言・記録分析）	他教科・領域、学校行事等との関連 北開水工コンサルタント(株)連携 総合「湿原の秘密教えます」で釧路川を訪れた際に気付いた川の様子や蛇行について思いださせる。※道徳内容項目「自然愛護」との関連を図る。

【年間指導計画例】

また、全教職員間で年間指導計画のデータを共有するとともに、学期末に振り返る時間を設定し、加除修正したり、日常的に学年打合せの中で活用したりしている。

(2)「地域人材リスト」の作成・活用（外部機関との連携）

本校では、多くの外部機関・講師と連携して教育活動を推進し、児童がふるさとのよさを実感し、地域に愛着をもつことができるよう、地域の素材を生かした教材開発に取り組んでいる。その実現には、各分野における専門的知識をもつ地域人材の協力が不可欠であることから、「地域人材リスト」を作成するとともに、外部講師を活用した場合はその機関名等を年間指導計画に明記している。

このように、年間を通して各学年がどのような外部機関、講師等と連携を図り、教育活動を推進していくの見える化することで、教育活動の質の向上を図っている。



標茶小学校 地域人材リスト ～外部機関・講師との連携～ <small>データは、R2チームシステム・(5)ふるさとキャリア教育 ・02 地域の教育資源活用と体験活動の充実</small>	5年	総合	湿原学習	(公) 北海道環境財団 釧路自然環境事務所	外部機関・講師の住所、連絡先等	環境洋教授（道大釧路）も協力	5月～11月	5月（遠足同行） 9月（中間発表会） 11月（地域参観日）
	理科	流れる水のはたらき	北海道開発局釧路開発建設部釧路河川事務所 (株) 北開水工コンサルタント			9月		

【標茶小学校 地域人材リスト】

3 学びが継続するサイクルの確立



【学びが継続するサイクルのイメージ】

(1) 日常の授業づくりの工夫

本校では、課題解決的な学習を重視し、学習課題の設定を工夫したり、学習した様々な知識及び技能を活用して、問題を解決する学習展開を意識したりしながら、全ての教科等において3つの授業づくりの視点を意識した授業に取り組んでいる。

これにより、児童が自ら学ぶための資質・能力を授業において育成している。

- 児童の興味・関心を高める導入や課題設定の工夫
- 問題を解決するための学び合いや練り合いの工夫
- 学習のまとめや振り返りの工夫

【3つの授業づくりの視点】

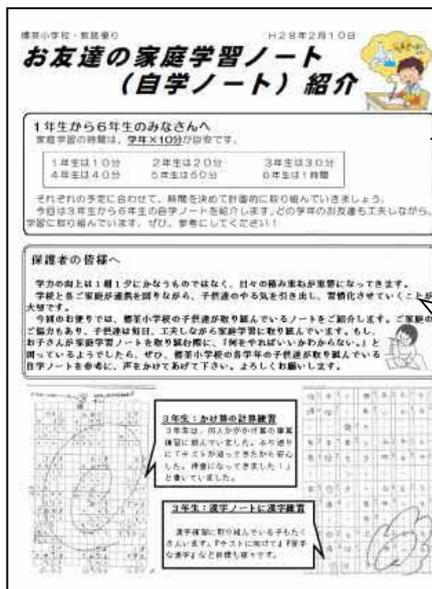
(2) 授業と家庭学習をつなぐ取組

本校の家庭学習では、毎日、宿題と自主的な学習（自学ノート）の取組を行い、児童が授業で学習したことを家庭で振り返り、次時の学習へつなげている。また、学習内容の確実な定着を図るよう、これらに係る学校の取組や児童の取組状況について、定期的に「教務便り」を発行し、現状及び成果・課題を家庭と共有し、学校と家庭が共通理解の基に、児童の学びが深まるよう支援している。

具体的には、授業と家庭学習をつなぐための取組を行っている。

- 授業の振り返り時における、家庭学習につながる教員からの助言
- 年度始めの学級活動で「家庭学習の手引き」を使用した家庭学習の方法及び内容の指導
- 定期的な自学ノートの紹介（学年・学級通信や自学ノート紹介掲示板）
- 保護者へ協力のお願い及び啓発（PTA総会等）

この取組を始めた当初は、自学ノートの提出率は70%程度であったが、現在では自学ノートの提出率は95%（宿題は100%）と、第2学年以上のほぼ全員が毎日自主的な学習に取り組んでいる。



家庭学習の進め方や時間の目安等、児童に確認してほしいポイント

家庭で保護者が家庭学習の指導をする際に、意識してほしいポイント

実際の自学ノートの中に見られた、意識して取り組んでほしいポイント

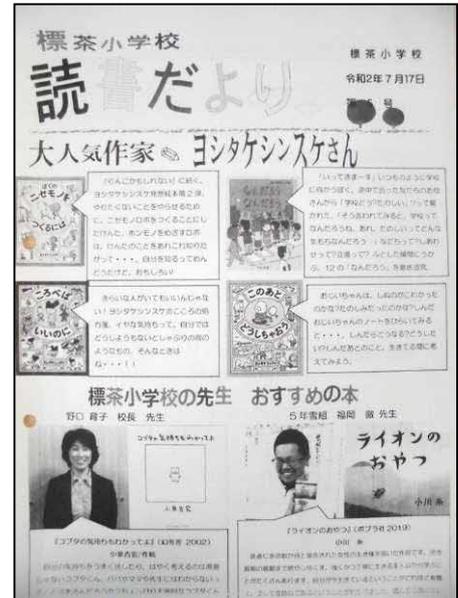
【教務発行の家庭学習に係るお便り】

(3) 授業と読書活動をつなぐ取組

児童が学校での学習内容に対して、より興味・関心を高めたり、さらに追究したりできるようにするために、学校図書館司書教諭が中心となり、学校での学習内容と読書活動をつなぎ、読書活動の充実を図る取組を行っている。

- 読書コーナーの充実（教科書に掲載されている本や並行読書ができる本を紹介）
- 「読書便り」の発行（児童の学習に合わせた内容にするなどの工夫）
- 家読の取組（夏・冬休みにおける親子で行う読書の啓発）
- 図書館との連携（読み聞かせ・お話し会・移動図書館の実施）

これらの取組をとおして、学校図書館を利用する児童が増加するとともに、各学級の授業において、積極的に学校図書館の本が活用されるようになった。



【学校図書館司書教諭発行の「読書便り」】

IV 成果と課題

1 実践の成果

- 短期間のPDCAサイクルを位置付け、「ねらい」「評価指標」と「学校評価アンケートの項目」「見取る場面」のつながりを明確化することにより、各取組の成果と課題を短いスパンで分析し、目標達成に向けて各チーム（校務分掌）が、より効果的な方策を検討することができるようになり、全国学力・学習状況調査で各教科の平均点が継続して全国平均を上回るようになった。
- 外部機関との連携を年間指導計画に位置付けたり、「地域人材リスト」として整理したりすることにより、児童個々の課題の追究に細かに対応できるようになったり、教職員が連携を図る機関を効率よく見付けたりすることができるようになり、教育活動の質の向上につながった。
- 日常の授業、家庭学習、読書活動を通して、学校と家庭をつなぎ、児童の学びが継続するようにすることで、児童が学びを授業の中で完結させることなく、授業で興味をもったことを家庭学習で調べたり、進んで読書に親しんだりする姿が見られるようになった。
- 全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査の結果では、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか」「学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか」の設問において、肯定的な回答が80%を超えるなど、主体的に学ぶ児童の姿の育成につながった。

2 今後の課題

- 一層学校改善を推進するために、各チーム（校務分掌）が連携して行う取組をより効果的・効率的に進められるよう、内容が重複したり、主担当が曖昧になったりしている取組のねらいや実施時期を精選する必要がある。
- 児童が、一層ふるさとのよさを実感し、地域に愛着をもつことができるようにするために、現在連携している外部機関と定期的な取組の振り返りを行うなど、学習活動の充実を図る必要がある。
- 主体的に学ぶ児童を育成するために、学校と家庭が繋がり、学びを継続する必要があることから、今後も、望ましい家庭学習や読書の在り方について家庭にフィードバックする必要がある。